



幾原雄一東大教授が  
米国セラミックス学会より  
Robert B. Sosman Award を受賞

([http://ceramics.org/?award\\_winners=yuichi-ikuhara](http://ceramics.org/?award_winners=yuichi-ikuhara))

本年 2015 年 10 月 4～8 日に米国のオハイオ州コロンバス市で開催された材料科学と工学会議 (Materials Science & Technology 2015; MS&T2015) にて、東京大学大学院工学系研究科総合研究機構の幾原雄一教授が Robert B. Sosman Award を受賞し、授賞式および記念講演が行われた。本賞は、米国のセラミックス分野の黎明期に大きな貢献をなした Robert B. Sosman 博士の偉業を記念して、セラミックス基礎科学の分野で顕著な業績をあげた研究者に毎年授与される。本賞は、1973 年よりはじまり、今回で 42 人目の受賞であるが、最初の受賞者は、セラミックス科学全体の基礎を確立した W.David Kingery 博士で、その後、主に米国の基礎科学分野の研究者が選ばれている ([http://ceramics.org/wp-content/uploads/2013/04/sosman\\_recipient\\_list\\_2015.pdf](http://ceramics.org/wp-content/uploads/2013/04/sosman_recipient_list_2015.pdf))。

今回の幾原教授の受賞は日本人としては初の受賞である。授賞式では、記念の盾とガラスのトロフィーを授与された。受賞を記念して“Grain Boundary Segregation, Vacancies and Properties in Oxide Ceramics”というタイトル

の記念講演を行い、これまで幾原教授が取り組んできた一連の粒界研究、電子顕微鏡研究が紹介された。講演会は約 300 名定員の部屋で行われたが、立ち見の聴講も多数見られ、非常に盛況であり、講演後の質疑応答も大変活発であった。また、本講演の前には、Sosman Award シンポジウムが企画され、関連分野で世界各国から集まった本分野の著名研究者らが招待講演を行った。主な講演者は、Arthur Heuer (Case Western Reserve University), Suk-Joong L. Kang (KAIST), C.B.Carter (University of Connecticut), Michael Finnis (Imperial College London), Stephen Pennycook (National University of Singapore), Nigel Browning

(Pacific Northwest National Laboratory), Gerhard Dehm (Max-Planck-Institut), Wai-Yim Ching (University of Missouri-Kansas City), Masanori Kohyama (AIST), Wayne Kaplan (Technion - Israel Institute of Technology), Klaus van Benthem (University of California, Davis), Naoya Shibata (The University of Tokyo) であった。

(柴田直哉 連絡先: 〒113-8656 東京都文京区弥生 2-11-16 (工学部 9 号館) 東京大学大学院工学系研究科総合研究機構 E-mail:shibata@sigma.t.u-tokyo.ac.jp) <http://interface.t.u-tokyo.ac.jp>

[2015 年 11 月 9 日]



◇参加報告◇

7<sup>th</sup> ICG Summer School 参加報告

International Commission on Glass 主催の 7th ICG Summer School “Glass formation, structure, and properties & Glass surfaces” が 2015 年 7 月 6 日から 10 日にかけて、フランス・モンペリエ大学で行われた。筆者は、日本セラミックス協会ガラス部会からの渡航費補助を受けてサマースクールに参加した。ここで、簡単ではあるが、サマースクールの様子を報告したい。

本サマースクールは、ガラス分野の若手研究者を対象にしており、ガラスの基礎科学に関する講義、参加者によるグループワーク、少人数でのチュートリアル講座からなる。ヨーロッパを中心に 8 ヶ国から 32 人の博士課程の学生や企業の若手研究者が集まり、議論と交流が行われた。講義は“Basic science”と“Glass surface & thin films”の 2 つのセッションが同時に行われ、参加者はセッション間を移動して興味のある講義を聞くことができた。共通講義では、ガラスの着色、イオン拡散、化学耐久性、“Basic science”では、ガラス融液の相平衡、結晶化、ガラス構造の解析手法、機械特性、“Glass surface & thin films”では、ガラス表面の分析手法、薄膜の堆積技術といったトピックが扱われた。グループワークでは、参加者が 8 つの班に分かれ、与えられたテーマについて議論を行った。「競合他社が新たに開発したガラスコーティングの組成と堆積方法を明らかにするにはどうすれば良いか」といった産業寄りのテーマが多い中、「ステンドグラスは下のほうが分厚いという都市伝説について検証せよ」という少し面白いテーマもあった。最終日の発表では、どの班も何かしらのユーモアを交えた発表を行い、盛り上がりを見せた。今年から始まったチュート

リアル講座は、4・5 人の参加者で講師の先生を囲み、講義を受ける企画である。筆者はラマン分光のチュートリアル講座に参加した。大人数の講義と違い、講義中でも気軽に質問ができるのが良い点で、理解が深まった。さらに夕食の時間には、おいしいフランスワインを片手に、先生方や他の参加者とフランクに語り合うことができた。

サマースクールは、参加者同士お互いに刺激し合える有意義な場であった。また国ごとの文化の違いや、大学と企業の違いを肌で感じる事ができた。勉強だけならば日本でもできるかもしれないが、多くの同世代の研究者と語り合い、交流することは、日本に籠もってはい決してできない。来年以降も、多くの日本からの若手研究者が参加することを願っている。最後に、渡航費補助により、このような貴重な機会を与えてくださった日本セラミックス協会ガラス部会に、心より感謝いたします。

(ガラス部会事務局長補佐 東京工業大学 岸 哲生)

